

# 「安全・安心」こそ都市の基本的なインフラである

インタビュー ● 大阪商工会議所会頭 野村 明雄

「商店街活性化に向けた「商店街賑わいプロジェクト」、  
「安全・安心なまちづくり」などについて、野村会頭が語ります。

## 商店街は地域コミュニティの中心

「大阪商工会議所は、地域経済の活性化に向けて「大阪賑わい創出プラン」を策定し、その重点テーマとして「地域商業の活性化支援」を盛り込んでおられますね。

大阪の賑わいづくりに、地域商業の活性化は欠かせないと思っています。中でも商店街は、地域住民にとって、日常の買い物をするだけでなく、近所さんと顔を合わせて語り合う場として、地域コミュニティの中心を担ってきました。大阪市には600もの商店街があつて、市町村単位で見ると、日本でも最も商店街の多い市なんです。各商店街がどんどん活気で溢れるようになりますと

大阪全体の賑わいを呼び起こすことができると思います。

「商店街の現況をどのようにお考えですか？」

私自身、大阪商工会議所の支部を訪問して、多くの商店街の方々ともお話をしました。後継者問題や大型店との競合、あるいは店舗や施設の老朽化といった課題を直にお聞きする中、商店街を取り巻く環境はさらに厳しくなっていると実感しました。大阪市の調査でも、72%の商店街が「衰退している」と回答しているそうです。こうした状況を変えていくために、観光客の呼び込みをはかったり、特色のあるテナントを集めたりと、新たな取り組みをされているところもありますが、ほとんどの商店街では手を打つことができていないのが現状です。

## 「商店街・賑わいプロジェクト」とは

「大阪商工会議所では、今年度より「商店街賑わいプロジェクト」を実施しておりますが、どのような取り組みをされているのでしょうか？」

「地域の課題解決」「財源の確保」「人材の育成交流」「地域資源の活用」「地域の



連携促進」の5つの切り口で各商店街を支援していきたいと考えています。まずは今年6月から支部のスタッフが250を越える商店街を訪問しました。そして国や府市の施策をお知らせするとともに、商店街の実態についても伺いました。これからは、要望のある商店街に対して、それぞれの実情に合った支援策を提供していきたいと考えています。そのほかにも、若手リーダーを育成するために交流の場をつくったり、「商店街フォーラム」を開催して、活性化の成功事例を語ってもらうことも企画しています。

「商店街の振興・活性化」には、何が重要とお考えでしょうか？」

やはり何と言っても、商店街の活性化に向けて、自ら意欲を持って取り組むことが重要です。今では大阪の夏の風物詩となった「なにわ淀川花火大会」も、もとはといえば、がんこフードサービスの小嶋会長をはじめ、地元十三の商店街の皆さんによる手づくりの地域イベントとしてスタートしたものでした。商店街の次の世代を担う方々が、このように「何とかしたい」という強い意志を持って立ち上がり、第歩を踏

み出して欲しいですね。もちろん様々な課題の解決は、部の人たちだけの力ではできないものではありますので、区役所をはじめとする行政や自治会、さらにはNPO団体やまちづくりコンサルタントなど、多様なネットワークを活用して欲しいと思います。専門家の知恵やノウハウを上手に使っていただくことが、成功への鍵となります。もちろん、10支部の拠点をもち大阪商工会議所も、ネットワークのひとつとして活用いただきたいと思えます。意欲のある商店街へのご支援は惜しみません。

## 割れ窓理論でまちの安全を

「さて、野村会頭は、地域の活性化にはま

ちの「安全・安心」が必要不可欠で、商店街にも重要な役割があるとお考えと伺いましたが、  
その通りです。「安全・安心」こそ都市の基本的なインフラであり、地域の魅力を高めるためには欠かせないものです。賑わいのある商店街の多くが「防災・防犯」の対策を行っているとの調査結果もあります。

また、かつて犯罪都市といわれたニューヨークは、「割れ窓理論」に基づいて、落書きやゴミ、違法駐輪などを掃いて、犯罪の少ない「国際観光都市」に生まれ変わりました。これに倣って、大阪商工会議所の都市再生委員会では、銭高委員長のもと「まち再生ワーキンググループ」を立ち上げ、天神橋三丁目商店街の土居理事長を中心に調査や議論を重ね、「割れ窓理論実践ガイドブック」を作成したほか、元警察庁長官の佐藤警察共済組合理事長や立正大学の小宮教授をお招きしたシンポジウムも開催しました。

「落書き被害と治安悪化に直面していたミニミのアメリカ村で、二斉に落書き消去が実施され、大阪商工会議所も支援されたと伺いました。

アメリカ村では落書きがあまりに多く、地元の御津連合自治会の皆さんは大変困っておられました。中村自治会長を中心に、具体的な行動に移すため、何度も議論を重ねましたが、落書きは広い範囲に及んでいた上、増える一方でした。ところが、NHKの番組で紹介されたこともきっかけとなつて、機運が高まった結果、10回にも及ぶ大規模な落書き消去が実現したのです。その参加者は地域住民だけでなく、多くのボランティアも含めて、のべ千名にもなりました。そして千カ所以上あったとされ



地域での話し合いで防犯意識の醸成を



落書き一斉消去活動(北区 茶屋町)

賑わい KEYWORD

# 【割れ窓理論】

(株)シティコード研究所 代表 森田 博一氏



大阪はひたたくり件数で日本一だといわれてきました。しかし、この7年間で発生件数は半分以下にまで減少しました(残念ながら、件数日本一の座は動きませんが)。自転車の前カゴに防犯カバーをかけるなど、個人個人の「スキ」を作らない行動が大阪でも定着し、ひたたくり犯罪の防止に効果をあげていると言えそうです。

同じように、まちも、スキを作らないことで犯罪を抑止できるというのが「割れ窓理論」です。逆にいうと、スキがあると、まちはどんどん悪化していくという考え方です。「割れ窓理論」という名は、路上に置いた自動車の窓ガラスを、枚割っておくと(スキを見せると)、車全体がボロボロにされてしまう(大きな被害を招く)という米国での実験結果がもとになっています。環境や状況が犯罪行為を誘発する、という理論です。

「犯罪のしやすさ(犯罪機会)」と犯罪者との関係は、磁石のN極とS極との関係のようなものです。両方の距離が狭まると、NとSが合体して犯罪が発生する、というわけです。ですから、「犯罪を実行する機

会」と「犯罪をする人」との距離を広げておくことが重要になります。「割れ窓理論」は、この「犯罪を実行する機会」を犯罪者から遠ざけ、悪いことをしにくい環境を作ろうという考え方です。

まちのスキとは、(建物や電柱に落書きがあつたり汚いビラが貼られたままになつている)、「自転車が乱雑に放置されている」(ゴミが無秩序に捨てられている)など、ふつう「清潔ではないな」「だらしないな」と感じるようなことです。このようなまちの状態は「このあたりは犯罪に弱いよ」というメッセージを発信していることになりま

す。つまり、犯罪機会のほうから犯罪者に近寄っていることになりま

す。割れ窓理論がよく知られるようになったのは、それを応用して実際に効果をあげたからにはかなりません。1980年代から実践されたニューヨーク市の例(軽微な違反行為の即時回復や徹底的な取り締まり)や、国内では札幌市の例(駐車違反の集中摘発)がよく知られています。理論の上

に立った実践が大事なのです。

地域で割れ窓理論を実践する場合、それによつて期待できる効果は、第一の目的である犯罪の減少や抑止だけではありません。スキのないまちは、ゴミや落書きのない清潔で落ち着いたまちです。気持ちのいいまちはそこに住む人だけでなく訪れる人も好感を与えます。そこが商店街であれば、お客さまにも良い影響を与えるでしょう。これが第二の効果です。

第三の効果、それは、実践行動がまちを変へることです。たとえば地域で落書きを消しを行うとき、多くの場合、まず落書きの被害状況を地図上に落とし込んだ「落書きマップ」を作ります。このマップづくりによつて、ふだん見過ごしがちなまちのいろいろなことを知るようになり、まちを愛する心が育まれます。落書きを消す許可を各戸の方々から取りつける行動を通じて、地域のさまざまな人を知ることもできます。みんなで落書きを消すことによつて人と人が結びつきます。地域が共通の目的達成に取り組みることにより、まちだけでなく、人びとに元気を与えるのです。□

る落書きは「掃きさらされたのです。自治会長をはじめ、地域のみなさんの強い思いが多くの人を動かして、今ではまち全体の雰囲気も格段に明るくなっています。

「同地域では、その後も落書き被害が再発した場合は根気強く、かつスピーディーに対応されていることですね。

そこが何より素晴らしいところですね。商店街や町会の方が毎日見回り、新たな落書きを発見した場合は、すぐに消去されるようになりました。落書き消しがその場限りの取り組みに終わることなく、地域が地道に続けていく活動として定着したのです。また、防犯カメラを設置したり、キヤッチセールス等の悪質な行為をなくす活動もスタートし、さらには地元警察とも連携することで、まちの治安は大きく向上しました。このようにアメリカ村において、地域住民自らが主体となって「まちを守る」活動が定着したことは、他の地域にとっても、大きな励みになりました。

「大阪商工会議所は、アメリカ村での「成功モデル」を他地域にも広げようという動きを推進しておられますね。

アメリカ村に続いて、北区茶屋町でも落書き消しが行われました。この取り組みにも地域住民やボランティアの方々150名

が参加されましたが、約百カ所にも及ぶ落書きが、齊に消去されました。このとき、アメリカ村の御津連合自治会の皆さんも参加されましたが、ご自身の経験をもとに「指導」をしていただいたことも、成功の要因のひとつでした。御津連合自治会に倣って、今でも落書き消しは継続されていて、同地域の落書きは激減しています。このように、住民の意識が高まり、自主的な防犯活動が各地に広がって欲しいですね。

## 大阪全体に活動の「うねり」を

「安全・安心」なまちを実現するために、今後はどのような取り組みをされるのでしょうか？

私は、アメリカ村や茶屋町のような「安全・安心」なまちづくりの裾野が広がり、大阪全体で活動の「うねり」をつくるのが大事だと思います。折しも、大阪府警は「治安総合対策プロジェクトチーム」を立ち上げ、大阪府、大阪市もそれぞれ「治安対策本部」を設置するなど、治安向上に向けての機運も高まっています。大阪商工会議所も、条例の制定や活動支援制度の充実を目指し、昨年、大阪市に対して「落書き問題解決」に関する要望書を提出しましたが、引き続き成功モデルの紹介にも力を

入れ、落書き消しの実績を増やしていきたいと思

「安全・安心」なまちづくりは、警察や自治体だけに任せられるものではありません。地元市民にも責任と役割があると思

います。地域での自主的な活動を立ち上げるにあつて、この「商店街賑わい読本」がきっかけとなれば嬉しいですね。

これからの私どもは、各地域での「安全・安心」なまちづくり活動や商店街の活性化の取り組みに対し、コーディネート役としてお役に立ちたいと考えています。

(聞き手・森田博一氏)



インタビュー ● 大阪商工会議所 会頭 野村 明雄

実践・割れ窓理論

これが  
落書き消去の  
ノウハウだ！

必ずできる、落書きゼロのまち

「落書き」は  
他の犯罪も誘発する

落書きの多い地域は、犯罪者に「住民の管理が甘い」「スキの多い場所」との認識を持たれ、罪を犯しても捕まらないだろうとの安心感を与えます。そうすると、落書きだけでなく他の犯罪をも誘発します。安全・安心なまちであるためには、住民が常に見守っているというメッセージを発信する必要があります。そのためには、わずかな落書きであっても、すぐに消すという地道な活動が必要です。

地域での落書き消しへの  
取り組み意識の醸成

地域内に落書きがされたら、どのように対応したら良いのでしょうか？やほり、そこに住む地域住民が一体となって落書き消去に取り組むことが肝心です。その前

割れ窓理論の具体策を代表する、そして、最も効果をあげている防犯対策である落書き消去活動についてご紹介いたします。



提として、落書きを放置するとまちが汚くなり、治安が悪化するという意識を地域住民が共有する必要があります。そのためには、日頃から商店会や町内会、PTAなどで、落書きを含めた防犯対策を話し合い、地域住民の防犯意識を高めていくことが大切です。

「落書き一斉消去」の実践

住民の防犯意識が高まり、「具体的な行動を！」となれば成功は目前です。落書き消去は思いのほか簡単で楽しい作業です。

ここでは、落書き消去活動の先駆者である岡山の落書き調査隊（隊長 岡崎久弥氏）が考案し、アメリカ村の落書き消去活動でも採用された「一斉消去」方式を紹介いたします。同方式は、極めて効果的かつシンプルな落書き消去ノウハウです。（左ページ参照）



「落書きゼロのまち」に向け大切なこと

【その1】出来る限り

「早く」「沢山」消しましょう

落書きの拡大を防止するには、落書きを放置せず、とにかく「早く」「沢山」消すことが大切です。そのためには、完璧に綺麗に消すのではなく、大きな落書きであっても20分以内で作業します。ひとつでも多くの落書きに「消去した」という痕跡を残すことにより、地域として「落書きは絶対に許さない」というメッセージを発信することが重要です。

【その2】粘り強く、

何度でも消しましょう

落書きは、ほとんどの場合、再発します。逆に消去した後に落書き被害が増大することもあります。しかし、何度も何度も消去することにより確実に落書きが減少することは過去の事例からも明らかです。粘り強く消去を繰り返すことにより、落書きは必ず追放できます。

【その3】連携の輪を広げましょう

落書き消去活動は、地域から幅広い参加を募りましょう。特に小中学生にとっては、地域のことやボランティア活動を知る良い機会となります。生きた教育の場として活用ができます。

また、商店会や町内会だけでなく、地元自治体警察、企業、NPO等にも活動の内容を積極的に説明し、連携の輪を広げましょう。それにより、消去許可の取得、人員や資材調達などでの協力が得やすくなります。連携の輪を広げ、活動の継続発展を目指しましょう。

【その4】新たな落書きの

再発を予防しましょう

落書き予防策として、  
①地域パトロールの実施  
②落書き禁止の看板設置  
③防犯カメラの設置  
などは効果的です。継続的な落書き消去作業とあわせて実施しましょう。

落書き消去活動は、「見、むずかしそう」「たいへんそう」と思われるかもしれませんが、実際は「簡単」「楽しい」作業です。落書き対策に迫られている商店会等での実践をおすすめします。また実施に向けご相談・質問等は大阪商工会議所まで遠慮なくお問い合わせください。

【問合せ先】大阪商工会議所

中小企業振興部 流通担当  
電話(06)6944-6440



落書き一斉消去実践のステップ

ステップ1 被害状況の確認 まず、落書き被害の状況を調べましょう

- (1) 落書き消去を行うために、まず、どの場所に落書きされているか、被害状況を確認します。落書きされている場所、大きさ等をカメラで記録します。
- (2) 調査の結果を、住宅地図に落とし込み、「落書きマップ」を作成します。これで、地域全体の落書き被害状況が把握できます。

ステップ2 消去許可の取得 落書きを消しても良いかの確認・了承を取りましょう

私有物や公共物に勝手に手を加えることはできません。落書きされている建物や塀などの所有者、公共物の場合は国や府・市などの施設管理担当に対して、落書き消去のための了承を取り付ける必要があります。了承を取る際には、具体的な消去方法やペンキの色、活動日時も先方に説明しましょう。

ステップ3 準備作業 資材を準備しましょう

まず、落書きの上からペンキを上塗りする為に、「ペンキ、薄め液、バケツ、刷毛やローラー刷毛、軍手、布製ガムテープ、ブルーシート、新聞紙、脚立」などを用意します。ペンキの色は、「ホワイト」、「ベージュ」、「グレー」の三色程度で対応します。金属板などの上にペンキで書かれた落書きは、「拭き取って」ある程度消すことができますので、「シンナーや消去剤、布キレ、ゴム手袋」も必要に応じて用意しましょう。



ステップ4 消去活動 では、実際に消去しましょう

作業は、ペンキで落書きを上塗りする作業と、シンナーや消去剤で拭き取って消す作業に大別されます。

- (1) 上塗り作業
  - ①ブルーシート等を地面に敷き、ペンキで汚れないようにします。
  - ②壁などを上塗りする場合、消去する範囲にガムテープを貼り、ペンキのはみだし防止とします。
  - ③あとは、ローラー刷毛などを用いてペンキで落書きを上塗りし、塗り終わったらガムテープをはがします。
- (2) 拭き取り作業
  - ①消去剤などを用いて布で拭きます。完全に消えなくても消したという痕跡を残すことが大切です。



※この2つの作業を役割分担することも兼務することもあります。消去規模が大きい場合は役割分担の方が効率的です。被害状況や人員に応じて臨機応変に作業しましょう。

# こうして解決！ わが商店街の防犯対策事例集

アメリカ村の落書き消去活動をはじめとする大阪の商店街における防犯対策事例をご紹介します。



## 事例1 アメリカ村の再生

1975年頃からファッションや若者文化の情報発信地として注目を集めはじめた大阪ミナミのアメリカ村。全国各地から観光客や修学旅行生が訪問するエリアとして知られるようになる。ところが、1995年頃より、地域内に悪質な落書き被害が拡大し、それにあわせるかのようになり、暴力・乱闘事件、違法屋台・露天の営業、キヤッチセールスなどの犯罪行為が多発する。その結果、「アメリカ村は怖い」と囁かれ、地域商業にも影響を与えるようになる。そして「これではいかん」と、2006年夏、地域の人々が立ちあがった。

**日本一の落書き地帯**  
「アメリカ村は、今や、日本一の落書き地帯ですね」  
岡山市で落書き消去活動を実践している岡崎久弥さんが、アメリカ村を見学した印象をこう語った。2005年8月、落書き消去活動の体験談を大阪のまちづくりに関係者にご講演いただくため、大阪商工会議所(以下大商)にお招きした際のことである。

その講演会に出席していたアメリカ村の御津連合自治会中村廣会長は、困った表情で「地域住民の減少や高齢化もあり、アメリカ村での落書き消去活動は難しい」と述べるに留まった。  
大商では、それまでも何度か中村会長を訪問し、協働による落書き消去の実践をご提案していた。しかし、当時、千カ所を超えることされたアメリカ村の落書きに立ち向かえるだけの経験、知識、ノウハウ、

## 割れ窓理論がまちと商業を救った

マンパワー等々を同自治会も大商も持ち合わせておらず、落書き消去に「立ちあがる」には至らなかったため、大商商工部では「決断。落書き消去活動」  
そこで、大商では、割れ窓理論の啓発と落書き消去ノウハウのとりまとめ普及が喫緊の課題であると考え、全国の落書き

消去の事例を研究調査し、2005年の11月に、割れ窓理論実践ガイドブック「きろとできる、まち再生」を発行した。具体的なノウハウを示すことで「われわれでもできるのでは」という意識を醸成し、落書き消去活動を普及させることを目指したのである。同冊子の印刷が完了し、最初にお届けした先、それはもちろん、中村会長で

あった。

そして翌年3月、転機が訪れる。岡崎氏の紹介で、NHK「難問解決」(近所の底力)の番組担当者S氏から大商に連絡が入ったのである。「落書き対策の番組を作ります。舞台はアメリカ村を考えています」。

数日後、来阪したS氏と中村会長をお引き合わせした。中村会長は同自治会のメンバーとも相談。その結果、「多くの方に支援をいただいているこの機会に、落書き消去を実施します」。アメリカ村での落書き消去活動の実施が遂に決断された。

### のべ千人が千ヶ所の落書き消去

同自治会は、2006年7月15日(9月末の毎土曜日の午前中に落書き消去活動

を実施。地元だけでなく、大阪青年会議所や大阪市職員労働組合などからの協力もあり、計10回の消去活動にのべ千人のボランティアを動員した。その結果、千ヶ所以上あつたとされる落書きはほぼ全て消去された。この様子は、「難問解決」(近所の底力)でも2回に分けて放送され、防犯対策の成功事例として全国で紹介された。  
アメリカ村では、落書きが激減したことにより、快適に買い物できる環境を取り戻した。客引きの姿も少なくなり犯罪件数も減少傾向にあるという。割れ窓理論が具体的な事例で実証される結果となった。

### 継続した取り組みで再発に対処

その後も同自治会では、地域の見回りを実施し、新たな落書きを発見した際は記録を残すと共に、速やかに消去する活動を継続している。2007年5月にはアメリカ村の約80ヶ所に新たな落書きが発見されるといふシヨッキングな事件が発生した。しかし、防犯カメラの映像が公開されたことにより犯人が出頭し、逮捕にまで至った。

2005年4月に中村会長が初代の理事長となり設立した西心斎橋商店街事業協同組合が、同年12月に地域内に77台設置した防犯カメラが大きな役割を果た

したのである。同地域の防犯に対するこれまでの真摯な対応が、現在の好循環を産み出している、と言えそうである。

### アメリカ村の成功を他地域に

また、中村会長は、アメリカ村での落書き消去の成功を、広く他地域に「技術移転」することにも積極的に取り組んでいる。2006年11月、大商が大阪市北区の茶屋町振興町会と協働して実施した「実践 割れ窓理論 北区茶屋町落書き消去活動」にも同自治会から有志20名が参加し、現場での指導に汗を流した。このほかにも、大阪市の呼びかけに応じ、浪速区で実施された落書き消去活動にも協力している。「自分達の経験やノウハウが広く活用できたら」との思いからの行動である。

わずか2年前、どん底の状態に喘いでいた「日本の落書き地帯」が、一転、「防犯対策の成功事例」に変貌した。そのことを中村会長自らが、「夢のよう」と語る。

アメリカ村の再生から学ぶこと、それは、どこかの地域・商店街であつても、住民が一致団結し、粘り強く防犯活動を実践すればまち再生は実現できるということ。アメリカ村の再生を見ていて、そう思わざるを得ない。□



御津連合自治会 会長 中村廣氏



アメリカ村(2008年10月)

## 事例4

十三本一商店会 会長 中田八朗氏

阪急十三駅の西口を出てすぐの商店街が十三本一商店会。中田八朗会長は、「だれもが安全で、安心して歩ける駅前商店街を目指し、放置自転車やビラ配りをなくすための活動を展開している」と話す。

同商店会周辺には、駅利用者の自転車が多数放置されているが、今年2月に建立した銅像「見返りトミー君」周辺では自転車が見当たらない。その理由は、商店会のメンバーが銅像周辺に放置自転車を置かないよう来街者に注意し、また、放置自転車を移動させる活動を徹底したため、「見返りトミー君の周辺に自転車を置いてはいけない」という意識を植え付けることができたからだ。

また、同商店会では、ビラ配りを見かけたら、警察の許可を取っているかを確認し、無許可のビラ配りはやめるよう注意す

る活動も行っている。特に、景気が悪くなると、客引きやビラ配りが増えるとのこと、中田会長は、対応に力を入れている。

このように、中田会長をはじめ、商店会のメンバーによる「だれもが歩きやすいまち」にするための日々の地道な活動が十三の安全を下支えしている。



見返りトミー君

## 事例5

心斎橋筋商店街振興組合 事務局長 平松康一郎氏

心斎橋筋商店街(振)は、3つのまちの安全・安心に関する事業を行っている。

1つ目は、2000年から毎週月曜日に実施している「クリーンキャンペーン」。毎回、役員や組合員30人が商店街内の清掃を行なう。2つ目は、キャッチセールス追放パトロール。南警察署と協働し、2003年9月から週2回、月曜日と金曜日にパトロールを実施し、キャッチセールスの一掃に取り組んできた。その結果、ピーク時には300人と言われた客引きも今は激減しており、パトロールの成果が表れている(現在でも、毎週金曜日のパトロールは継続中)。3つ目は、今年から大阪市と実施している路上喫煙やポイ捨て禁止の啓発キャンペーン。来街者へのリーフレット配布や口頭での注意を行っている。

平松康一郎事務局長は、「これらの活動は、組合員がこのまちを良くしたい

という思いから主体的に取り組み、今では商店街活動の一環となっている。商店街が自主的に防犯や美化活動を実施したことで、警察や行政も協力してくれるようになった」と、活動の第一歩を踏み出す大切さを強調する。さらに、「皆が同じスタッフジャンパーを着て活動することを通じ、『このまちを良くしよう』という熱い思いを商店街のメッセージとして伝えていきたい」としている。



## 事例2

宗右衛門町商店街振興組合 防犯委員長 福長徳治氏  
(ミナミ歓楽街環境浄化推進協議会 発起人・実行委員長)

宗右衛門町商店街(振)では、1995年来、宗右衛門町地域の環境浄化のため、防犯パトロールを定期的に行なっている。

また2005年には、地域、近隣商店街・振興町会、行政等で「ミナミ歓楽街環境浄化推進協議会」を結成し、官民一体による環境浄化活動を実施している。

同活動の中心メンバーである福長徳治さんは、活動を成功に導いたポイントとして、①歴史と風情、賑わいのあるこのまちをみんなが守っていきたくて強く思っていること、②活動の成果が出てくれば、まちを本当に良くすることができるという期待感が皆に生まれ、大勢の人が総力を挙げて活動を後押ししてくれるようになったこと、③行政や警察と一致団結して、スクラムを組むことができたこと、④環境浄化活動を継続できる組織づくりができたこと、の4点を挙げる。

現在、同商店街では、平成23年度の電線地中化、道路美装化の完成予定に向け、『宗右衛門町リファイン23プロジェクト』を推進している。同プロジェクト実現に向け、はみ出し看板や客引きなどの路上違法行為をゼロを目指し、違法行為を行っている店舗に「改善依頼書」を渡して警察署へ報告するとともに、「街頭防犯カメラ」の設置による、違法行為の抑制などに努めている。



## 事例3

なんさん通り商店会 会長 岡島立美氏

なんさん通り商店会は、戎橋筋の南端から日本橋の高島屋東別館に至る地域の商店会。駅前立地だけに放置自転車が後を絶たず、同商店会の岡島立美会長は、「放置自転車問題が地域の最重要課題」として、取り組みを進めている。その一環で実施しているのがサイクルサポーター活動。商店会員だけでなく、広く協力を募り、自転車の整列、駐輪場への誘導や放置自転車追放に向けた啓発活動等を行っている。サイクルサポーター活動は年々活発化しており、行政との関係も強化されてきている。

「先義後利」を座右の銘とする岡島会長は、「地域の担い手である商店会が率先して行動を起こし、粘り強く続けることが大切」と考えている。「地域が結束して課題に立ち向かってこそまちの安全も維持できるし行政も手を差し伸べてくれる。結

果として来街者も増え個店も潤う」。そんな商人哲学が難題解決の原動力となっている。

岡島会長は、2008年9月に近隣の商店街や行政と連携した連絡協議会を立ちあげ、そのなかで、「なんさん通り商店会活性化基本構想」を提案。地下駐輪場や電線地中化などを軸とした新たな「先義」に踏み出したところである。

